

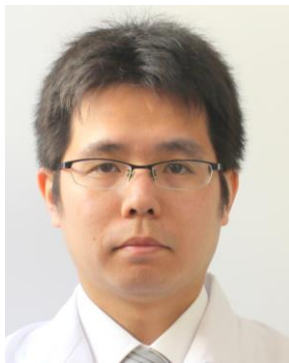


CD サークルだより 第7号

山口赤十字病院 内科外来

平成 27 年 6 月発行

1. 森下寿文先生からのメッセージ



平成 27 年 4 月より当院内科に赴任した森下と申します。沖縄県出身で山口県での生活は今回が初めてで、まだまだ戸惑うことも多い日々を過ごしております。医師 8 年目であり、前任にあたります平野先生よりもまだまだ未熟ではありますが、精いっぱい努力して患者さんそれぞれにあった医療を行いたいと考えておりますので、今後よろしく願いいたします。

この CD サークルのような場合は医療者と患者さんが診察室以外で触れ合える場であるとともに患者さん同士が触れ合えるという点でも貴重な場だと思います。治療以外の生活を含めての工夫や考え方など参考になることは多いと思います。自分と同じ悩みを持っている方もいるかもしれませんので、我々医療スタッフとともどもこの場を大切にしていきたいと思えます。さて、クローン病や潰瘍性大腸炎などの炎症性腸疾患は長期にわたって疾患と付き合っていくことが必要であり、そのため医療スタッフとともに治療薬なども長い期間使っていくことが多いです。そこで今回は種々の薬剤について簡単にですが説明をさせて頂きたいと思えます。

① 5-アミノサリチル酸製剤

ペンタサ®やアサコール®などが含まれ、悪い状態を良くする「寛解導入効果」と、良い状態を維持する「寛解維持効果」の両方があり、比較的安全性も高いため、治療の基本となることが多い薬です。飲み薬の他にお尻の近くの病変に対しては注腸や坐薬で使用することがあります。

先に述べたように安全性が比較的高いため、長期的に使用している方も多いですが、ごく稀にこの薬に対するアレルギーで症状がかえって増悪する方もいます。

② 副腎皮質ステロイド

強力な炎症を抑える力と免疫を抑える力を持つ薬で、炎症性腸疾患以外にも膠原病などさまざまな炎症性疾患に使われており、プレドニゾンなどがよく使われます。

投与方法も口からの内服や坐薬・注腸の他、中等症～重症では点滴で投与することもあります。有効性の高いお薬で、元々体にあるホルモンに近い成分の薬ですが、免疫を抑えるため、使用中は細菌の感染には注意する必要があります。また長期間の投与では胃潰瘍や骨粗しょう症、浮腫や肥満、そして股関節の骨が崩れてしまう大腿骨頭壊死など様々な副作用が起こる可能性があります。

炎症性腸疾患に対する治療効果としても基本的には寛解導入効果はあるものの、寛解維持効果は無いと言われておりますので、できるだけ短期間で投与に止めておくのが望ましいと思われます。

③ 免疫調整剤

免疫を抑える、過剰な免疫を調整する力を持つ薬で、種類によって寛解導入効果が強いものや、寛解維持効果が強いものなど得意分野が異なります。

寛解導入効果が強いものとしては、シクロスポリン A(ネオーラル[®]、サンディミュン[®])やタクロリムス(プログラフ[®])があり、いずれも臓器移植などにも使われる強い免疫調節力を持っています。

そのため、投与に際しては採血で血中濃度を測りながら薬の量を調節する必要があり、測定する設備が無い施設では使いづらいことがあります。また、副作用も細菌の感染の他、肝・腎障害、高血圧、頭痛、手のふるえ、多毛・脱毛など様々です。

寛解維持効果が強いものとしてはアザチオプリン(イムラン[®])やメルカプトプリン(ロイケリン[®])があります。こちらは血中濃度測定の必要は無く、比較的使いやすい薬です。しかし、やはり細菌の感染には注意が必要であり、その他にも肝障害や発熱、嘔気、下痢、脱毛などの副作用が起こる可能性があります。また稀ですが、無顆粒球症という疾患を発症することがあります。これは免疫の最前線の一つである白血球の仲間の顆粒球(好中球)がほとんど無力化するもので緊急で入院が必要になります。そのため、使い始める際には2-4週間は採血などに注意する必要があります。

④ 生物学的製剤

炎症性腸疾患を引き起こす体内の伝達物質を人工のタンパク質で抑制し、活動性を抑える薬です。2か月に一度病院で点滴をするインフリキシマブ(レミケード[®])、2週間に一度自宅で皮下注射をするアダリムマブ(ヒュミラ[®])などがあります。疾患の原因を狙って抑える薬ですが、やはり免疫を抑える薬なので細菌の感染、特に結核などには注意する必要があります。

その他、タンパク質なのでアレルギー反応が起こる可能性もあり、人によっては徐々に効かなくなることがあります。また、投与の方法も注射なので時間がかかったり、使い方に慣れが必要だったりということもあります。薬の値段も比較的高めです。

⑥ 栄養療法

特にクローン病に効果が強いもので食事を吸収しやすいものなどに変更することで腸の負担を減らす目的で使います。安全性は非常に高いですが、食事の楽しみを制限されるため、人によっては苦痛が強い可能性があります。

⑤ 抗生物質、整腸剤

腸内の細菌を整えることで炎症性腸疾患を補助的に抑える目的で使います。免疫を抑える薬でないので、細菌の感染の心配は少ないですが、抗生物質に関しては副作用として多い症状(嘔気、下痢など)やアレルギーなどがやや出やすい薬です。

また、炎症性腸疾患自体に保険適応があるわけではないので、長期使用には制限があることもあります。



⑦ その他

下痢や腹痛、貧血など炎症性腸疾患に伴う様々な症状に対して、それらを和らげる目的で薬を使うことがあります。

これらの薬は、炎症性腸疾患自体を改善する効果は無く、時として悪化させることもあるので注意して下さい。



炎症性腸疾患の治療には免疫を抑える薬も多いため、副作用にも注意が必要なことがあります。患者さんの訴えではじめて副作用がわかることがありますので、気になることは医師に相談してください。

しかし、副作用を心配するあまりに病気を悪のまま放っておくとそちらが不利益が多いこともあります。

基本的に医師は副作用も考えた上で薬を決めていますので、よく相談した上で主治医を信用して薬を使ってください。

